人間・西郷竹彦の豊かな世界

吉田　章宏
岩手大学教育学部教授

西郷竹彦先生、こんにちは。しばらくご無沙汰いたしております。お元気でいらっしゃいますか。このたび、先生の『文芸・教育全集』の第五巻『人間観・世界観の教育』の「解説」を書かせていただくことになりました。初校ゲラ刷りで、全巻を通して読みました。共感し啓発されるところが多く、楽しく読ませていただきました。私にとっては初めての文章ばかりでしたので、それぞれに非常な新鮮さを感じました。「解説」を書くために読んでいるのだということをすっかり忘れて、しばし、「西郷竹彦の世界」に浸らせていただきました。この読書の機会を、有り難くまた嬉しく思いました。

さて、そこまではよかったのですが、我に返って、「解説」をいざ書くという段になって、はたと困ってしまいました。この素晴らしいご本の「解説」なるものを書く資格が果たして私にあるのだろうか、という疑念が生じて来てしまったからです。刊行の前に読ませていただいた私は、刊行の後にこの本と接することになる多くの読者の方々よりも、ただ少し早めに読んだというだけに過ぎないのだ、と思われたからです。このご本のそれぞれ

の文章の成立の経緯や背景については、私は、足立悦男先生の「解題」で知る以上は何も知りません。で、無知な私には、そもそも「解説」する資格など何もないと思われたのです。少なくとも、通常の意味での「解説者」のように、「これはこうなのだ」などと「説明」する「解説」を書くには、私はまったく不適格だということに思い至りました。多くの読者はむしろ、西郷先生ご自身による「解説」こそを望まれるのではないでしょうか。そこで、「解説」には不適格な私が敢えて「解説を書く」という課題を立てて、改めてどうするか、考えてみました。先生の授業を受けた子どもさんたちの一人ひとりは、授業の感想文をそれぞれに書いていらっしゃいます。それと同じように、私は、一人の読者として、先生への手紙の形を借りて、いわば「読書感想文」を書かせていただき、それをもって「解説」に代えさせていただくことにしよう、と考えました。どうか、この貧しい「解説者」をお許し下さいますように。

まず、このご本には、「人間・西郷竹彦の豊かな世界」が豊かに示されている、と感じました。示されている世界が「豊か」であるばかりでなく、それと同時に、その示し方も「豊か」なのです。はじめ、『人間観・世界観の教育』という、私にとって非常に魅力的な書名を先生から伺ったとき、私は、W・ディルタイの『世界観の研究』、K・ヤスパースの『世界観の心理学』、J・ピアジェの『子どもの世界観』などの著作をすぐ連想しました。そして、西郷先生のお考えが全巻に亙って理論的に、「文芸・教育」の多くの具体例を伴って、展開されている、というようなご本を、勝手に想像しておりました。で、初めて、全体の構成を目次で拝見したとき、軽い戸惑いを感じました。先生の三つの巻頭論文、講演記録、西郷先生ご自身による国語の授業記録と、お弟子さんによるその報告、西郷先生が聞き役として登場なさる、三人の科学研究者との対談記録、西郷先生による授業の記録と、その授業を受けた子どもたちの感想文、その授業をめぐるシンポジウムの記録、それに、その授業をめぐる対談……という構成は、その形式だけからすると、「著作」の目次と言うよりも「雑誌」のそれを、私にふと連想させたからです。しかし、本文を読み進むにつれて、私の戸惑いは次第に消え、成程と合点が行くようになりました。

このご本は、多様な視点を駆使する「映画の方法」ともいうべき「豊かな方法」で展開されているのですね。そこには、西郷先生のお姿にしても、実に多様なお姿が描き出されています。北海道から九州・四国まで、日本全国を爽やかな風のように駆け巡る西郷先生。教師たちに「人間観・世界観を育てる教育」を情熱的に説いてやまない西郷先生。授業実践を通して、多くの子どもたちに、優しく、そして易しく、豊かな人間観・世界観を教えていらっしゃる西郷先生。悪しき教育と教育者の姿に、火を吐くような厳しく激しい批判を浴びせる西郷先生。物静かに楽しく対談し、優れた科学研究者たちから、深く鋭い洞察を引き出す西郷先生。そして、西郷先生を師と仰ぐ教師や研究者の方々との率直で喜びに満ちた語らいを楽しまれる西郷先生。そして、飲んで酔えば、くつろいだ宴に興じる西郷先生。……。そこで用いられているカメラ・ワークは、仰角に俯角、アップにロング……、実に多種多様です。もちろん、そこに描かれているのは、西郷竹彦という「存在」がカメラに映る多様な姿ばかりではありません。先生のお姿と同時に、「西郷竹彦の世界」が豊かに描き出されているのです。西郷竹彦の「認識」の世界、そして「感情」あるいは「喜怒哀楽」の世界、とも言えるでしょうか。読者の眼前には、「人間観・世界観の教育」が、平易にしかも内容豊かに展開されて行くのです。いえ、読者は、それをただ眼前に眺めるだけには留まらず、西郷竹彦の「人間観・世界観の教育」の世界に引き込まれ、その世界に共に生きることをおのずと誘われるような「仕掛」と「仕組」が、そこには巧みに組み込まれているのです。繰り広げられている世界は、読者に聞くことを強いる単調な、いわば、演説調のお説教の「人工林」のモノクロの貧しい世界では全くなくて、読者が共に生きることへと誘われる、変化に富んだ語りと語らいの「自然林」の極彩色の豊かな世界です。示されている世界、先生のお言葉でいう「認識内容」（本書で読者が学ぶことになる人間観・世界観、そして、文芸・教育観）が豊かであると同時に、その示し方、「認識方法」（本書で読者がそれらを学ぶときに行うことになるその学び方）もまた豊かなのです。その世界に生きる読者には、次第に豊かな「認識の力」（三五ページ）が育って行くのでしょう。

私が読ませていただきながら共に生きたこの豊かな世界での経験のすべてを、与えられたスペースで語ること

は、とても困難です。ここでは、豊かな森のここかしこで咲いている美しい言葉の花たちと、私がたまたま出会ったその時の感動とその思い出を語るようなつもりで、幾つかの事柄を、断片的に、述べさせていただくことにしたいと存じます。

「世界」また「世界観」という言葉について、先生は、「人間は世界の中で生きている」（八三ページ）と書き、「世界とは何か」（一三五ページ）と問うていらっしゃいます。そして、「母と子の世界」を謳った、宮崎県の小学生・野添佐渡子さんによる素朴な詩「ぬくもり」をとりあげて、「これはもうりっぱなこの子なりの人間観であり、世界観というものが、たとえちいさなことであっても、そこに表現されている」（一三六～七ページ）と、説いていらっしゃいます。同様に、文芸作家もその作品で、「一つの世界を描こうとしている」とも、説いていらっしゃいます。先生のおっしゃる「世界」と「世界観」は、私が学んで来ました現象学や現象学的心理学での、「人間」を「世界内存在」あるいは「現存在」（ハイデガー）として、「世界」を「生きられた世界」（Lived World）あるいは「生活世界」（Life-world）として、とらえる考え方に近いことを感じました。すると、「人間観・世界観」という表現の中の「・」（中黒）が気になり始めました。「人間観・世界観」は、同時に、「人間観」、「世界観」そして「人間・世界観」なのではないかと、私は理解いたしました。和辻哲郎の『倫理学』に解明されていた「人」と「人間」の意味のつながりを思い出しました。「人間とは『世の中』自身であると共にまた世の中に於ける『人』である」としたあの解明です。で、「人間」と「世界」は次のように循環的につながることを考えました。「人間」から「世間」、「世間」から「世界」、「世界」から「人界」、「人界」から「人間」、そしてまた、「人間」から「世間」、……という循環です。この循環を考えたとき、先生の「文芸は人間学」というお言葉に、一つの納得が得られるように思われました。作家がその作品で「一つの世界」を描くとき、そして、その作品を読者が読み、その「一つの世界」に生きるとき、それは、同時に、「人間」を作家は描き、その作品の読者はその「人間の世界」を生き、そして、読者は自ら「一人の人間」として自らの「一つの世界」を生きることになる、そんなふうにも言えるでしょう。先生は実に明快に書いていらっしゃいます。「文芸・詩というものは一つの世

界ですから、この世界の中に入るということは、この世界をくぐって今度は現実の世の中を、現実の人間をもう一度見直すことになります。そうすると、今まで気がつかなかった、今まで見えていなかったものが見えてきます」（一九一ページ）と。同様にまた、全集のタイトル『西郷竹彦　文芸・教育　全集』の「・」にも、深い意味が秘められているのかもしれないことに気づきました。「文芸・教育」は、同時に、「文芸」、「教育」、「文芸教育」を意味しているのでしょうか。そして、「各教科が今はばらばらになっている。……それらが一丸となって子どもたちの人間観・世界観をつくるんだ」という先生のお言葉があります。その「一丸とする」ための主柱となるのが「文芸・教育」なのですね。こうして、「文芸・教育」の重要性が、はっきりと見えてきました。そして、国語教育を単なる「読解指導」に留めてはならない、読解指導を踏まえつつも、それを超えて、「人間観・世界観の教育」にして行かなくてはならない、という先生のご主張も、力強く明快に響いてきました。先生が、「文芸」と「文芸教育」を踏まえつつ、それを超えて「文芸・教育」へと、さらに「人間観・世界観の教育」へと、深めていらっしゃった、その道筋が、次第にはっきりと見えて来るような思いが、私には、いたしました。

「文芸・教育」全集に、「動物学」、「環境科学」、「生命科学」の優れた科学研究者の方々と西郷先生との対談が収録されていることも、こう考えてくると、少しも奇異なことではなく、とても自然で好ましいこととして感じられるようになります。これらの対談は、確かに、西郷先生の応用物理を基底とする自然科学の豊かな学問的素養によって初めて可能になったことなのでしょう。しかし、それは、先生の趣味的な好みによって企画されたというような性格のものでは決してないことがよく分かりました。「文芸教育」、「国語教育」、「人間観・世界観の教育」という道筋で、「文芸・教育」においては、すべての人間の「人間観・世界観」が主題となりうるのだからです。人間科としての国語科は、他教科と協力して、深く確かな「自然認識」と「社会認識」を育てる中心的教科であることになるからです。例えば、国語教育の説明文教材は、「読解指導」のための教材としてだけでなく、科学者の人間観・世界観に近づくための教材として、意味付けられ、位置付けられることになります。「教材を」から「教材で」への道は、国語教育において、言語の本質を活かす道である、と思います。そして、科学者の方々

との対談は、そうした「人間観・世界観」に読者が親しみ、それぞれの人間観・世界観を豊かにするための、一つの場としての意味を帯びてくることにもなるようです。それは、詩教材や物語教材が、「教材で」、詩人や作家の人間観・世界観に親しむためのものとして意味付けられるのと、全く同様です。こうして、「文芸・教育」の世界が、パスカルに対比された「幾何学の精神」と「繊細の精神」の両者を同時に共に包み込む、広大で奥深い世界となることが、私にも感得されました。

子どもたちに教育されるべき「人間観・世界観」について、こう書かれています。「ですから、『世界とは何か』と言ったら、二つあげたらいい。世界というのはみんなつながっている。人間というのはみんなつながり合って生きている、一蓮托生の世界である、そして、関わり合った形ですべてのものが変わっていく、ということです。こちらが変われればあちらも変わる、あちらが変われればこちらも変わる。それはつながりがあるからです。何かが一人だけ勝手に変わるということはあり得ません。何かが変わるということは、何かしら、そのものとつながり合ったものが、いろいろな形で変わっていきます。共に生き、共に変わっていくのです」（一二一ページ）。このことを、先生は、簡潔に、「この世はもちつもたれつ」（七七ページ）、「すべては、つれあって変わる」（八〇ページ）とも表現なさっています。また、この「相関」、「共生」、「共進化」、「共存共栄」……の思想を、「レンゲ草とミツバチ」とか「どんぐりとリス」などの、具体的イメージ豊かな典型例で、子どもたちに分かりやすく説くすべを示して下さっています。そこには、「一方で、より特殊、具体的でありながら、同時に、……一般、普遍をも表わすことができる」（五一ページ）、芸術的イメージ・形象の本質が活かされているようです。ふと、ロシアの心理学者ルビンシュテインの「事物現象の普遍的な相互連関」という思想を連想し、また、「すべては流れる」、「諸行無常」、などの古くからの言葉を思いました。さらに、先生の『宮沢賢治「やまなし」の世界』でお教えいただいた「法華経」の比喩による巧みな説き方を連想いたしました。「変化する」ということについて、自然は「変わる」が、社会は「変わるのではなく変えていくこと」がその基本なのだ、というお言葉がとても印象的でした。そして、そのような考え方から、教育についても、芦田恵之助の「共に育ちましょう」に基づく、「共生」

に連なる、「共育」という思想が述べられています。西郷先生のお仕事が、先生のお仲間たちとの「合作」というべきものだと述べられ、先生ご自身が、「共生」と「共育」を実践的に生きていらっしゃることに、深い感銘を覚えました。

先生の説いておられる、「やさしく教える」だけでなく「もっとも大事なことをやさしく教える」ということが、そして、「わかりやすさ」と「おもしろさ」という表現上大事な二つの条件を満たすことが、この巻全体で見事に実践されていることには、心を打たれました。この西郷先生のこの実践に通じる教育実践を自らのものとするためには、教師たちは、恐らく、人間や物事を「典型として認識する」文芸から、もっともっと豊かに学ばなくてはならないのでしょう。それにしても、印象に残る数々の言葉が、この本の全巻にちりばめられていました。そして、それらの言葉に出会う度に、多くのことを考えさせられました。例えば、――科学とは異なり、文芸は「人間を丸ごととらえるということ、人間を歴史的に見るということ」（七二ページ）。P・リクールの『時間と物語』を想起させられました。そして、掛け替えのない命の貴さを子どもに教えるために、「文芸教育というのは、作品を媒介として、子どもたちに、生や死に出会わせてやる場である」（一三三ページ）という言葉。トルストイの『イヴァン・イリッチの死』を思い出しました。

「人間が砂漠を作った」、「火事」、「うんこ」、「大阿蘇」などなどの授業記録とその報告を読みながら、いつしか、私も子どもさんたちと一緒になって、学んでいるような思いに浸っていました。先生の授業を受ける前、中学三年生の瑞江さんは、三好達治の詩「大阿蘇」の感想として、「何だか、少しさみしい詩のように思えました。山は煙をあげているというところから、やがてそれはけじめもなしにつづいている、のところまでが印象に残りました」とだけ書いていました。ところが、その同じ瑞江さんが、授業の後では、次のような実に内容豊かな授業感想文を書いたのです。「……はじめはむずかしく考えすぎていたけれど、よく考えてみると、身近にも、たくさん転がっているようなことで、だけど、そういう見方っていうのは、鋭い目をもっていないとなかなか気づかないものかもしれません。詩というものは、一見、大がかりなことを言っているように見えるけど、実は、そう

いった身近なものが描かれているものが多いんだなと思い、それに気づける詩人というのはすごいと思ったし、また、それを読み取れる人も、詩人と同じ目をもっているということだから、西郷先生はすごいと思いました。そして、詩というものの味わいを知ることができて、一段と好きになりました。／先生の言われた、同時的に物をみることはとても難しいものだと思いますが、私もそれを学んで、少しでも心が豊かになれたのだから、これからの生活に役立てていくようがんばりたいです。すばらしいことを与えてくださってありがとうございました」（四八〇～四八一ページ）。この感想文は、「文芸・教育」の目指すところを、一つの典型として、見事に実現しているように思われます。そして、このような豊かな理解をたった一つの授業で育て上げた西郷先生の授業の素晴らしさを物語っている、とも思います。このような深く豊かな考え方、思想を学べる子どもたちの幸せを思いました。そして、これからの世界に生きる人間としてのすべての子どもたちに、そのような幸せこそを贈ることなくして、教育の存在理由が何処にあるか、と思いました。

大学における教師養成教育に対する厳しい批判のお言葉を、胸痛む思いで、読みました。「先生方は、教師養成コースを経て、今こうやって教師になっておられるわけですけれども、大学なら大学で、人間認識の方法、人間の分かり方、世の中の分かり方、ものの見方・考え方というものをきちんと教わってきたかと振り返ってみれば、おそらくそういう経験はまったくないと思います。そういう学科も講座もなかった。それが日本の教育の悲しむべき、恐るべき実態なのです。ですから、私どもは、口をすっぱくして、『ものの見方・考え方を育てる教育』ということを主張してきているわけです」（一一一ページ）。私も、この鋭いご批判に、残念ながら、共感せざるを得ません。そして、その恐るべき実態が「変わること」をただ座して待つのではなく、この悲しむべき実態を「変えていく」ために、私たちにできる限りの力を尽くさなくてはならない、と思います。それは、コマギレの「いろいろな知識を雑多につめこむだけ」の教育、「物知りをつくるだけ」の教育、「知識・技術の習得のみ」をめざす教育、を克服して、豊かな「思想の形成」を促す教育、子どもたちを「自分でものを考える」人間へと育てる教育、を実現することでしょう。それが「人間観・世界観の教育」なのだ、私なりに、そう理解いたしま

した。宮沢賢治の有名な素晴らしいことば「世界が全体幸福にならない限り、個人の幸福はありえない」（三九六ページ）を心に刻んで、私も、瑞江さんのように、これから「がんばりたいです」。

初めて読ませていただく文章群なのに、共感するところが多く、先生が長年にわたって歩んでいらっしゃった道に、私も教育実践に学び現象学に学ぶなかで、それとは知らずに少しずつ近づいて来ていたのだ、と気づき、勇気づけられ、心から嬉しく感じたことでした。また、先生の「ここのところが、大事なのです」という、念を押す詰めの言葉の記録を読むとき、あたかも、岡山の研究所で、先生独特の鹿児島弁のアクセントでおっしゃるお声が聞こえてくるような、楽しい錯覚にとらえられ、たいへん懐かしくまた愉快な思いがいたしました。

以上が、「解説」に代える、先生宛の手紙の形を借りた、私の「感想文」です。

今年（一九九六年）は宮沢賢治の生誕百年の年です。この拙い「感想文」を、賢治ゆかりの岩手県盛岡で記しました。このような読書の機会をお与え下さり、本当に、ありがとうございました。

「世界全体の幸福」を目指される先生の、ますますのご活躍をお祈り申し上げます。

解説者紹介

吉田章宏（よしだ　あきひろ）教育心理学研究者。一九三四年東京に生まれる。東京大学教育学部卒業。米国イリノイ州立大学大学院卒業。Ｐｈ．Ｄ．。授業実践の現象学的心理学を研究。現在、岩手大学教育学部教授。放送大学客員教授。東京大学名誉教授。著書に『教育の方法』、『教育の心理』（放送大学教育振興会）など。